

橋田壽賀子
清水曙美

魔の

橋田壽賀子ドラマ



妻の印

清水曙美

魔の 季節

橋田壽賀子ドラマ

橋田壽賀子 (はした すがこ)

1925年(大正14年)、韓国・ソウル生まれ。日本女子大國文科、早大演劇科卒業後、松竹脚本研究生となる。1959年フリーとなってテレビドラマの脚本に専念。「愛と死を見つめて」「ただいま!!人」などで人気作家に。嫁と姑の問題を新しい時代状況から描いた「となりの芝生」や人間の老いを見つめた「夫婦」で「橋田調」を確立。NHKテレビ小説「おしん」(83年)や、「いのち」(86年)、「春日局」(86年)などのヒット作を生み、幅広い視聴層を捉えている。92年橋田文化財団を設立。第一回橋田賞を「東芝日曜劇場」が受賞。92年春からは9年ぶりにNHK連続テレビ小説「おんなは度胸」を担当する。

清水曙美 (しみず あけみ)

北海道旭川生まれ。「放送作家教室」に学び、1981年「放送脚本新人賞」に入選。同年、受賞作品は「妻と妻」というタイトルで「東芝日曜劇場」にて放送される。作品に「かけおち通り」「妊娠ですよ」「ざけんなよシリーズ」などがある。

※本書は平成7年4月より、TBSテレビ系で放映されている橋田壽賀子原作・清水曙美脚本のドラマをもとに、中野玲子氏が小説化したものです。

魔の季節

第一刷 一九九五年五月二十五日

著者 橋田壽賀子

清水曙美

発行者 高部 務

発行所 株式会社ライオンブックス

〒162 東京都新宿区天神町71番地

宇野ビル2F

電話 03-32268-0690 (代表)

発売元 株式会社ワニブックス

〒150 東京都渋谷区恵比寿4-4-9

えびす大黒ビル

電話 03-5449-2711 (代表)

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

ISBN4-8470-1235-6 C0095 P1400E

魔の季節

二十年ぶりの同窓会

6

昔の恋人

24

あたしも働きたい

52

ゆれる心

72

やつぱりやらせていただきます

102

『杏』開店

128

やけぼつく

146

シヨツタ

172

いちばん大事なもの

208

装丁

製作協力・写真提供

芦澤泰偉事務所
TBS

二千年ぶりの同窓会

四月中旬の、日曜日の朝であつた。

洗濯かごを抱えて庭に出て来た杏子は、雲ひとつなく晴れ渡つた空を見上げ、すがすがしい春の空気を胸いっぱい吸い込んだ。

明るいオレンジのニットにジーンズがよく似合う。ショートヘアに黒目がちの瞳、化粧けのない顔は三十八歳の主婦にはとても見えないが、てきぱき手際よく洗濯物を干してゆく姿は、すっかり手なれた主婦のもの。かごからシーツを取り出して物干し竿にかけ、両手でバンバンとたたいて几帳面にシワを伸ばす。

「お母さん！ はやくう！」

「おなか、すいたあ！」

庭に面したリビングから、杏子の二人の子供たち、八歳の順子と六歳の直之の呼び声が聞こえた。杏子は苦笑しつつ、肩越しに「はいはい」と返事を返すと、急いで残りの洗濯

物を干し終え、家の中へ入って行った。

杏子の家は東京の郊外、小田急線の新百合ヶ丘に近い新興住宅地の一郭にある。二階建ての建て売り住宅だが、一昨年引っ越して来たばかりなのでまだ新しく瀟洒な家だった。

夫の浩介と職場恋愛で結ばれた杏子は、結婚と同時に仕事をやめて家庭に入った。世にいう専業主婦である。もともと家庭的な彼女は、センスのよい家具をそろえ、家を隅々まで磨き立てたり、手作りの料理を作ったり、喜々として家事に専念している。

この日の杏子は、朝からソワソワしていた。夜、北海道にいた頃の、高校の同窓会に出席することになっていたからだ。早々と洗濯をしていたのも、実はそのためだ。

ほどなく、明るい陽射しあふれるリビングに、かぐわしいコーヒーの香りとパンの焼ける香ばしい匂いがただよい始めた。今朝はめずらしく、夫の浩介も家族と一緒にテーブルを囲んでいる。

浩介は杏子より四歳年上。矢崎重工の営業部員だ。長身でスマートな外見に加え、仕事もバリバリのやり手、将来を嘱望されている。が、それだけに接待も多く、夜はバーへ日曜日はゴルフへと、妻や子供たちの相手をする間もない忙しさだ。たまに接待ゴルフのない日曜があると、疲れがドツと出て、昼過ぎまで寝ているのが常だった。

「お母さんが一人でどっかに行くなんてめずらしいよね」

サラダの皿から顔をあげて、順子が言った。杏子はにつこりして、

「夢だったんだ、お母さん。パンプス、カツカツ鳴らせながら、一人で颯爽きつそうと街の中歩いてみたいなあって、あなたたち育てながら、何度思ったか知れないもの」

浩介は苦笑した。

「同窓会って六時からなんだろ。なんにもこんなに早くバタバタしなくたって」

「いろいろしとかなきやいけないことがいっぱいあるの。主婦がたまに出かけるって、大変なんだから」

「同窓会同窓会って、なにをそんなにソワソワするのかなあ。お互いにシワがふえたのを確かめ合うだけじゃない」

「フフ、二十年ぶりに会うんだもん。昔と同じじゃ、かえって気味が悪いわ」

「二十年ぶり？」順子が目を丸くする。「てことは、十八から会ってなかったの？」

「そうよ。あの頃はけっこう可愛い女の子だったんだけどなあ、お母さんも」
「でも、今はただのおばさんだ」

「いいの、いいの。お母さん、ただのおばさんで、充分満足してるんだから」

杏子がはずんだ声で切り返す。

妻の上氣した顔を見て、浩介は思わずニヤニヤ笑いを浮かべた。

同窓会は都内の某ホテルでおこなわれることになっていた。

はりきつてめかしこんできた杏子も、華やいだホテルの雰囲気は一瞬気を吞まれ、入口で足をすくませる。と、そのとき、杏子の脇をすり抜けようとしてふと足を止め、人なつこい笑顔を向けた男がいた。

「やっぱり！ 後ろ姿ですぐわかりましたよ」

「あのう？」と、杏子はげんな顔。

「俺？ 根岸吾郎ねぎしごろうって言います。野村さんの三年先輩で、あ、いや、今はもちろん野村さんじゃないんでしょうが」

「はあ、渡わたって言います、渡哲也の渡」

「渡杏子わたけいこさんか。俺、覚えています？」

杏子は首をひねった。どうしても思い出せない。

「ごめんなさい」

「やっぱりそうか。だけどこっちはしっかり覚えてますよ。小学校も一緒だったし……」

吾郎は腕時計をのぞき、「行きましょう」と杏子をうながした。

杏子は吾郎と連れ立って、厚いジュウタンを敷きつめたロビーを横切り、エレベーターで中二階にある宴会場へ急ぐ。会場にはすでに四十名ほどの中年男女が集い、いくつかの

グループにわかれて談笑していた。

杏子がおずおずと会場へ入って行くと、すぐに三、四人の女友達が駆け寄って来た。

「もしかしたら、どたん場で気が変わっちゃって来ないのかって、心配しちゃった」

「ごめん、方向音痴だから迷っちゃって」

杏子の手をとるようになって中へ引く張つてゆくのは、ハデに着飾った丸本茜まるもとあかね。彼女は杏子のクラスメートで、家が近いこともあり、今だに親しく行き来をする仲である。

「驚いた。全然変わってないわあ」

二十年以上に顔をあわせた則江のりえが、杏子を見て感嘆のため息をもらす。茜が横から、
「でしょう。美人はいくつになっても美人ね」

杏子はテレくさそうに、

「まさか！ 十年以上も家に閉じこもりつきりだもの。すっかりおばさんよ」

たちまち杏子の周りには人だかりができ、和やかな笑い声があふれた。

「なんか食べるもの持って来ようか」

茜が則江たちと連れ立って杏子のそばを離れると、先刻の吾郎が、すらりとしたハンサムな男と一緒に近づいて来た。

「先ほどはどうも」

「いえ、こちらこそ」

杏子がにこやかに答える。吾郎は連れの男を指さして、

「彼、覚えてませんか？」

杏子は視線を吾郎から隣の男に移した。男はにつこりほほえんで、

「高坂裕こうさかひろしですよ。澄川交番の隣の布団屋の息子で、吾郎と同じく三年先輩の……」

「ああ。そういえば、なんとなく、そんな方がいらしたような……」

「覚えてなくて当然だなあ。そっちが高校入学した年に俺たち、卒業したんだから……」。

お子さんは？」

「二人です。下の子がやっと今年小学校に入って、やれやれつてとこです」

「で、なにかやってるの？」

「いえ、ずっと専業主婦ですけど」

「それにしては所帯じみてないなあ」

杏子は頬を赤らめて、「まさか、そんな」

「東京にはいつ出て来たの？」

「短大がこちらでしたから。そのあと矢崎重工でちょっとOLやってて」

「矢崎重工！ あの有名な一部上場の」

吾郎が口をはさむ。

「ええ……」

「わかったぞ。ご主人とは同じ職場で知り合つて、オフィスラブの末、結婚した。当たり前でしょ？　ハハハ」

裕は豪快に笑つた。

そこへ、食べ物や山のように盛り上げた皿を手に、茜たちが戻つて来たので、入れ違いに吾郎と裕が離れて行く。茜は裕の後ろ姿を見送つて、

「意外だったなあ。杏子と高坂さんが顔見知りだったなんて」

「ううん、かすかに記憶がある程度。高坂さんは覚えてて下さったみたいだけど」

「やっぱり美人は得なこと。あの人、今日集まつてゐる人たちの中でも出世頭じゃない」

杏子はたいして興味を感じなかったが、茜はなおも、

「『ワンストップ』ってスーパーのチェーン店あるでしょ。そこのオーナーなんだから」

「へえ、そうなの」

「今日このパーティにも、高坂さん、かなりお金を寄付してくれたらしいし……」

「この不景気な時期に、すごいわね」

杏子はあらためて裕の姿に目を向けた。大勢の友人たちに囲まれて愉快そうに笑つてい

る裕は自信と活気にあふれ、そこだけ明るい光に包まれているように見える。

やがて宴もたけなわとなった。

「パーティになんか来たことないから、あたし、すっかり雰囲気酔っちゃった」
頬を紅潮させて、杏子が茜にささやくと、

「やあね、見た目は昔と同じでも、心の中はすっかりおばさんじみちゃって」
茜はくったくのない笑い声を上げる。

「大木さんだわ、ちよつと挨拶しなきゃ」

茜が人々の合間を縫うようにして遠ざかってしまうと、待つていたように、両手にシャ
ンペンのグラスを掲げた裕が近づいて来た。

「このシャンペン、けっこういけますよ」

「あら、すみません」

裕はカチリとグラスを合わせた。

「今度、いつ会えるかわからないから白状しちゃうけど、君は僕の初恋の人なんだ」

杏子が驚いて裕の顔を見ると、

「ずうっと気になってた……だけど、いつか必ず会えるだろうって。とうとう会えて、本
当にうれしかった」

裕の熱っぽい眼差しに出会って、杏子は返す言葉もなくうつむいてしまう。

と、そこへ、吾郎が興奮した面持ちで近づいて来た。

「この前、裕ちゃんに連れてってもらった青山の『25時』ってクラブのママ、同じ高校の出身だったんだね」

「いや、それは初耳だなあ」

「彼女、少し遅れるけど、パーティに出席するそうだ」と、吾郎は杏子に視線を向け、

「もしかしたら、あなたより一年上か、同学年かなあ」

「お名前、なんておっしゃるの？」

「さあ、名前までは知らないけど……二年くらい前にオープンした会員制の高級クラブでけっこうマスコミなんかも脚光を浴びてる店らしいですよ」

裕は早速名刺入れを取り出して、名刺を調べ始めた。

「あったあった。クラブ『25時』のママは、柚木安津子さんって人だ」

柚木安津子……。名前を聞いたとたん、杏子の表情が変わった。

「そういえば、テレビの身の上相談のレギュラーに決まったって、この前話してたよな」

「ごめんなさい。ちょっと失礼します」

杏子は二人に頭を下げ、するりと身をひるがえすと、人目をさけるように会場から飛び